

# あーかす

米子医療センターマガジン#44  
MAY 2024 (令和6年5月号)

新年度のご挨拶

## 協働して 病院機能を充実する

特集

## 能登半島地震における 医療支援報告

## 日本医療機能評価機構認定病院として 認定されました

### 初期研修医通信

～初期臨床研修を振り返って～

New Face

消防避難訓練を実施して

地域医療連携室の掲示板

Enjoy! 学生 LIFE



## ■ contents ■

- 03 新年度のご挨拶  
協働して病院機能を充実する
- 04 特集  
能登半島地震における医療支援報告
- 08 日本医療機能評価機構認定病院として  
認定されました
- 09 初期研修医通信～初期臨床研修を振り返って～
- 10 New Face
- 12 消防避難訓練を実施して
- 13 地域医療連携室の掲示版
- 14 Enjoy! 学生 LIFE



患者さまと職員が向き合った姿で、患者さま中心の医療提供とYONAGO(米子)の「Y」、MEDICAL(医療)の「M」、CENTER(センター)の「C」の文字を、まごころ、信頼、安心、良質の医療をイメージする「ハート」に組み合わせ「米子医療センター」の明るく元気な姿を表しています。

## あーかす

あーかす(Arcus)とはラテン語で「虹」を意味し、英語のArc(弓、橋)+Us(私たち)で「私たちが地域の架け橋になる」という意志を込めてタイトルとしました。私たちの持ついろいろな表情を、地域の方々や医療関係者に広く知って頂き、絆を更に深める情報を掲載してまいります。

# 協働して 病院機能を充実する



独立行政法人国立病院機構 米子医療センター  
病院長 久留 一郎

## はじめに

新緑の候、皆様におかれましては、ますますご盛栄のこととお慶び申し上げます。今年は能登半島地震が起り多くの方が被災されました。一日も早い被災地の復興をお祈りします。

さて、ポストコロナ時代となり、社会の動きが加速しています。北陸新幹線の延伸、パリ夏期オリンピック・パラリンピック開催、米国大統領選挙などが予定されています。医療に関しても大きな変化が起ります。時間外労働の上限規制による医師の働き方改革や現行健康保険証廃止などの施策が始動します。このように変化する医療環境の中で当院は人の輪を強固にして対応して参ります。

みなさんは今年の上半期から20年ぶりに新紙幣が発行され

デザインが新しくなることをご存知でしょうか?紙幣の「顔」が10000円札は福沢諭吉から渋沢栄一へ、5000円札は樋口一葉から津田梅子へ、そして1000円札は野口英世から北里柴三郎へと代わります。渋沢栄一は近代日本の資本主義経済と社会のシステムを作った人、津田梅子は津田英学塾の創始者で女性高等教育に尽力した人、そして北里柴三郎は北里大学の創始者でジフテリアの発見など近代日本医学の父です。今の日本にとって、組織の運営と教育と医学の発展は、わが国が取り組むべき重要なキーワードであるために紙幣の「顔」となっているそうです。さて、これらのキーワードは当院にも当てはまります。そこで①病院運営の向上、②教育・研修・研究の推進、③医療水準の向上という3つのキーワードについてお話をします。

## keyword 1

### 病院運営の向上

日本医療機能評価機構では全国の病院を①患者中心の医療を推進しているか、②良質な医療を実践しているか、③病院の地域の命を支えるという理念を達成するために適切に組織を運営しているかという点(病院機能評価といいます)を評価し合格認定を出しています。今年、当院はこの認定病院となりました。今後も地域の命を支える病院として患者さんやご家族に信頼される病院となるべく継続的に病院の機能が向上するように運営して参ります。

## keyword 2

### 教育・研修・研究の推進

近年、医療スタッフが医師に代わって仕事の一部を行う制度(タスクシフト・タスクシェアといいます)が導入されています。そのために病院は日進月歩する医療の進歩に応じて職員が知識や技術を身に付ける教育の機会を作る必要があります。そこで院内の教育研修を充実させながら、患者さんにとって安心安全の医療を提供できるように努めて参ります。

## keyword 3

### 医療水準の向上

病院の発展には医療技術の向上は必須です。新しい医療技術を安全に当院で使えるようにするための仕組みを持った委員会を整備しました。これによって新しい治療法を安全且つ迅速に患者さんに届けることができます。また、地域の医療のIT化に対応し患者さんが病院を受診しやすくするためにデジタル化を鳥大病院と連携して進めています。

以上申し上げました課題を職員一体となって克服してゆくために2024年の当院の病院目標を「協働して病院機能を充実する」とします。「協働」という言葉を使いました。これは同じ目的のために平等の立場で協力して共に働くことを意味し、役割分担が事前に決まっているときに使われます。病院機能評価により明確になった私たちの役割分担に沿って、お互いの結びつきを強固にしながら、協働して診療・ケアを充実させて参ります。どうぞご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

## 2024年度 協働して病院機能を充実する

1. 安心・安全で質の高い患者中心の医療を実現する。
2. 協働してチーム医療を深化させ地域医療に貢献する。
3. 教育・研修、研究を効率よく協働して充実する。
4. 病院機能の面から病院運営を協働して革新的に強化する。





米子医療センター医療救護班チーム(事務尾先君は市立輪島病院ロジの仕事にて不在)と神奈川県看護協会から派遣された看護師さんたちの絆

## 能登半島地震における 医療支援報告

令和6年 能登半島地震医療救護班隊長 富田 桂公

令和6年、辰年正月は荒れた1年の始まりでした、元旦早々、能登半島で震度6の地震が起きました。テレビで壊れた家、焼け崩れた街並みが映し出されるたびに、遠く離れた我々に何かできることはないものかと心を痛めておりました。そんな矢先に、米子医療センターの本部である国立病院機構より、被災地の一つである輪島市への医療救護班派遣の依頼があり、私、副薬剤部長の木村さん、師長の沖村さん、看護師の田村さん、事務の尾先さんの5人が医療救護班チームとして編成されました。テレビを見て多くの方が思いを寄せた、被災された方々に何かしてあげたいという気持ちと一緒に、地震からおよそ1か月経過した被災地に医療救護班として喜んで赴くこととなりました。2月4日より2月8日までの5日間、移動日をのぞくと3日間の活動でした。今回、私たちチームの活動報告と被災者の皆様から頂いたお心を報告したいと思います。

以下、文中に輪島市で撮影した写真を掲載します。個人情報の観点より、被災された方々のお顔、お姿は撮影していません。また、写真を見られてご気分を悪くされる方もあろうかと思いますが、その場合は写真を飛ばして読んで下さい。

### 応援する心を伝えたい

出発前より、まず、被災された方々にどう話しかければよいのかという思いに駆られました。当院に通院されている90歳の外来患者さんからは、「テレビから映し出される映像は、まるで終戦直後の日本と同じです」というお話しをお聞きました。今このときも、ウクライナ、イスラエルのガザでは戦争が続いており、こうした世界から送られてくる映像と能登からの映像は確かに同じ光景でした。戦争も災害も残された人々にとって多くの脱ぐりされない傷を残していると思いました。被災された

方々は、ヒト、モノ、住まい、故郷、これまでつながっていたものを一瞬にして失われてしまっています。この喪失感は計り知れないものであり、この喪失感に対する悲嘆(深い悲しみになげくこと)をどう我々が受け止め、どう我々が寄り添えばよいのか、出発前の悩みでした。東日本大震災の経験から「気持ちわかります」、「そのうち楽になりますよ」等々の気休めの言葉はさらに被災された方のお気持ちを逆なですることは知られておりました。「我々は見捨てない、応援しています」という真心を被災された方々にお伝えするために、最終的に考えたことは、「よく頑張ってください」という言葉を伝えたいという気持ちで米子の地を出発しました。

## 見たことのない光景

鉄道にて金沢まで7時間かけて移動しました。金沢では、国立病院機構医療救護班の前線基地となっている金沢医療センターで、手配して戴いていたレンタカー2台に非常食、水、簡易トイレ等々の物品を詰め込みました。普段であれば2時間程度でたどりつくところの金沢から輪島市までの120kmの距離を、車でおよそ5時間かけて移動しました。途中、下水道は復旧しておらず、途中の休憩所では設置されている簡易トイレで用を足しました。輪島市のおよそ40km手前の高速道路(のと里山海道)では、片側一車線の道が20mに渡り陥没していました。能登半島の西側から東側へと続く県道の海岸線に入りますと、まだ輪島市からおよそ30km近く離れているにもかかわらず、家屋の倒壊がみられました。見たことのない光景に「わー」と驚愕の声を出すしかありませんでした。何度、「わー」と叫んだことやら。輪島市に入るのは山道を抜ける必要がありましたが、途中、土砂崩れ、道路の陥没がたくさん見られました。雨、雪が再び降れば、二次災害で崩れ落ちた土石に巻き込まれるのではないかという生死の不安に駆られました。輪島市内に入っても、道路は陥没し、うねり、家は倒壊しており、電柱は傾いており、平衡感覚を失うような状態でした。

輪島市に到着後、医療救護班の仕分けをする輪島市役所救護調整本部に、まず向かいました。国立病院機構からの3チームと日赤から派遣された3チーム、合わせて6チームの医療救護班が集結しており、診療が必要な避難所を振り分けられました。その後、避難所をめぐるりましたが、どの避難所に行くにしても、道路が陥没し、ところにより隆起し、うねり、時速20kmは出せない状態でした。さらに、倒壊した家が道路にせり出し、電柱が直角に折れており、その隙間を車ですり抜けて目的地の避難所に行く状態でした。我々のチームは、輪島市に到着し



地震により道路が分断されている

た午後より輪島市内より南に4km離れた公民館に派遣されました。その避難所には42名の被災された方々が身を寄せて暮らされており、図書館、和室、ホールの3か所に分散して過ごされていました。ここでは、北海道から派遣された保健師さんと共同して、診療が必要な方々をスクリーニングして診察しました。ストレスからの手指のあれ、胃痛の方がいらっしゃいました。夕方ホテルに戻り、災害非常食を持参の水をわかして食べました。ベッドはありましたが、シーツが交換できておらず、持参の寝袋で寝ました。翌日の午前中には、前日回った公民館とは異なる市内の公民館に行きました。そこでは、90名の方が1Fの事務室、2Fの体育館に分かれて生活されていました。体育館の状況はよくテレビで見られたように、低い段ボール箱で、各家族、もしくは各グループ4-5人が仕分けしているような状態で、生活が丸見えになっていました。昼には給水車が公民館の玄関先にやってきて、公民館に避難している方だけではなく、近所の被災された方々も集まってきて、水をビニールの袋に入れて、住めるご自宅に戻っていかれました。ここでは、徳島県から派遣された保健師さんと共同で診療しました。急性胃炎、脱水、ストレスからきていると思われる寒気、急性気管支炎、急性上気道炎、不眠症の患者さん等々を診療しました。午後からは市内の小学校に行きました。140名の被災された方々が体育館で共同生活されていました。人の高さほどの布で出来たシートで囲われていて、各家族、各グループが仕分けされていました。外では、自衛隊が供給する入浴テントの前で被災された方々が20名程度、列をつくって待っていらっしゃいました。ここでは、横浜から派遣された看護師2名が常駐されており、すでに十分な健康管理をされていました。しかし、医療救護班が3-4日前に来て以来の派遣であったため、我々チームは神様扱いしてもらいました。ここでも、長い避難生活のための床ずれ、ストレスからの目の出血の診察をしました。最終日の午前には、輪島市内から2km南西のプレハブに向かいましたが、す



地震により倒壊した家のため道路が分断されている

次ページへ続く→



に避難所は空で、二次避難所に移動されたようでした。その後、市内に戻り、1住宅に15名が間借りしながら生活されている避難所に行きました。昼間は男性陣が仕事に行ったり、給水所に水をもらいに行ったりと力仕事をし、女性陣が食事、掃除をしたりと、分担して仕事をされていました。重いものをもつことによる腰痛症が発症しておりました。私も、被災地で生活するための食事、寝袋の装備を車から降ろし、載せるという慣れない作業で、腰は痛くなり、左肘を痛めました。被災された方々は、生きるために協力しながら頑張っている様子が見られました。

## 避難所での不便な生活

避難所での被災された方々の生活についてです。飲水は給水所により配布され、お風呂は自衛隊の入浴テントで行い、食事は市から配布されているようでした。しかしながら、トイレは下水道機能が回復しておらず、施設内の流れないトイレを掃除したり、屋外の簡易トイレを使用して、用を足していらっしゃいました。診察させて頂いた方の多くは、皮膚が乾燥し、脱水～脱水の一手前でした。そうした方々には、「自分たちも昨日、輪島に入りましたが、トイレの回数を減らすために水分を取らないようにしていました」と素直にお話しをした上で、少しでも水分をこまめに取るようにお勧めするしかありませんでした。医療事情は、我々が医療救護班とした直後より、避難所から市立輪島病院に行く巡回小型バスが出たり、町の開業医の医院も午前中に始まったりとか回復傾向にありました。しかし、こうした情報は輪島市役所医療調整本部も把握しておらず、NHKのテレビからの情報でした。避難所ではテレビのないところもあり、また、情報が避難所に正確に伝えられていないという



地震で折れ曲がった電柱のため道路が分断されている

ものでした。地震から1か月過ぎても、各担当部署がそれぞれ一生懸命やればやるほど、分業化されて、担当部署間の連絡が取りにくくなるものだとわかりました。また、避難所で生活するのに、洗濯できない布団、まくらを寝床にしたり、やっと市から届いた段ボールベッドで眠られたり、避難所ごとに異なりました。また、パーティーションも、公民館の一部屋を一家族で過ごされたり、4-5人で生活する区間を段ボール箱で仕切るだけの避難所、段ボールの筒を柱にして、白いビニールで区間を分ける避難所、それぞれ創意工夫により、個人・家族で生活されていました。しかし、地震から1か月経過すると、避難所内での人間関係がこじれたり、被災直後に金沢、県外等々に二次避難された方々が輪島市内の避難所へもどりたいという希望があり、受け入れる側との両者の思いが見え隠れしておりました。早く多くの被災者の方々を収容でき簡易住宅がたくさんできればと思いました。

どこの避難所に行っても、被災された方々は見かけ上は、明るく、元気そうに振舞っていらっしゃいました。あいさつしますと、「がんばります」と被災された方より返答がありましたが、「よくがんばってこられましたね」とお話すると、大粒の涙を流されました。地震後のつらい経験に思いを馳せられたものだと思います。「休めるときに休んでください」との気休めしか浮かびませんでした。また、接した被災された方々からは、ごあいさつの声をおかけするだけで感謝の言葉しか返ってきませんでした。自分の目を見て話してもらったと喜ばれる場面もありました。また、被災地で保健師さんたちのチーム、自衛官、国土交通省の職員、警察官、消防隊の方々等々、多くのお助け部隊の人たちとすれ違いました。あいさつするとあいさつをきちんと返していただきました。オールチームで暮らしている人たちを応援しているのを感じられる日々でした。私たちはこの4年間、新型コロナウイルスにより社会が分断されてきました。コロナ禍の中、三密を避けることにより、ヒトとヒトのつながりが寸断され、学校給食も黙食に、さらに、インターネットを介して、いつでもどこにでも自由自在にアクセスできる世の中が進み、ヒトとヒトのつながりが希薄化してしまいました。今回の医療救護班を経験させて頂き、コロナ禍で社会が分断された中、ヒトとヒトが顔を合わせて課題に共に向かい合う「共創コミュニケーション」の大事さを痛感しました。ヒトは目と目を合わせて、触れて、心の安心が得られる生命体であるのだとつくづく思い知らされました。

## 音のない町

焼け崩れた輪島市の朝市を休憩時間に訪れました。私自身の気持ちの中では、多くの方が亡くなられた地に足を運ぶのにためらいがありました。訪れてみると、音はなく、ただ、海から吹き付ける北風を背中が感じるだけでした。ただただ、手を合わせることしかできませんでした。1か月前まで、ここには普通の生活があり、人々の笑顔に満ち溢れていたことを想うと、ふと涙がこぼれました。この輪島塗で有名な町が元の機能を取り戻すにはまだまだ時間はかかりそうです。人間を超えた力に翻弄されることは、災害を被った方々だけでなく、我々でも、経験したくなくても、経験せざるをえないことがあります。こうした悲嘆、苦しみに自分なりの意味を一生懸命見出したいと思っても、自分では答えは見つかりにくいと思います。今回の貴重な経験を活かして、今後とも、言葉にならないこうした心の叫びに耳を傾けていきたいと思いました。



地震によりヒトの思いを分断した火災後の朝市

## 米子に帰ってからも

出発から5日目に、輪島から金沢を通り、米子に帰ってきました。大山が見えたときには、心の休まる故郷に、チームみんなが無事に帰ってきたのだと胸を撫でおろしました。しかし私は、帰還翌日には、まっすぐ立っている建物、電信柱が斜めに倒れているように見え、また、廊下がうねっているように見えました。輪島市の残像を連れて帰ってきたようでした。過酷な道路状況の中、無事にチームを避難所につれて行ってくれた、木村先生、尾先君には感謝の念に堪えません。また、避難された患者さんの病状をやさしく聞きとり、診察が必要な患者さんをスク

リーニングしてくれた、沖村師長さん、田村看護師さんにも、この場を借りてお礼を申し上げます。また、やさしく送り出し、そして帰還を喜んでくださいました医療センター職員の方々、特にこのチームを編成してくださいました久留院長先生、女性看護師を選任してくださいました元林看護部長、そして、後方支援をしてくださいました黒田事務部長にお礼を申し上げます。



私と事務尾先君との共同活動

## 最後に

この寄稿を読んでくださりましてありがとうございました。皆様方の応援のお気持ちは輪島に残してきております。この寄稿を書いている今、この時も能登地震に被災された方々、能登半島で活動している医療班、保健師さん、国・県から派遣された方々、自衛隊の隊員の方々等々、がんばっていらっしゃる光景が臉に写ります。被災された方々、米子に戻りましても、我々チームは皆さんと御一緒に、引き続き遠くから応援している気持ちでいっぱいです。私としましては、5年、10年経ち輪島が復興したら、もう一度、輪島へ行ってみたいと思っています。

令和6年2月9日

亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。



# 日本医療機能評価機構 認定病院として認定されました



病院機能評価とは病院の質改善活動を支援するツールと言われています。患者さんが安全で安心な医療が受けられるよう4つの評価対象領域から構成される評価項目を用いて評価されます。



副院長 南崎 剛  
(病院機能評価準備委員会 委員長)

第1領域は患者中心の医療の推進(病院組織の基本姿勢や患者の安全確保に向けた検討内容、意思決定)、第2領域は良質な医療の実践1(診療・ケアにおける確実に安全な実践)、第3領域は良質な医療の実践2(確実に安全な診療・ケアを進めるうえで求められる機能の各部門・部署)、第4領域は理念達成に向けた組織運営(良質な医療を実践する上で基盤となる病院組織の運営、管理状況)で、これを各専門領域(診療、看護、事務、薬剤、療法士など)の知能と経験を有する各サーベイヤーがチームを組み、病院訪問し審査を行います。病院の種別により一般病院1(地域のかかりつけ病院)、一般病院2(中核病院、基幹病院)、一般病院3(特定機能病院、大学病院本院)、リハビリテーション病院(回復期リハビリテーション病院)、慢性期病院(療養病棟を中心とした病院)、精神科病院、緩和ケア病院(緩和ケア病棟を持つ病院)の7つに分かれ、270床(一般250床、緩和20床)の当院は、一般病院2と緩和ケア病院に当たります。

鳥取県ではこの病院機能評価(公益社団法人 日本医療機能評価機構)をすでに43病院中16件(37.2%)が認定を受けています(全国では25.2%)。大変遅くなった感はありますが、当院も約1年半前からコロナ禍の中、職員一丸となって評価取

得に向けての準備を進めました。コンサルティング会社 ユアーズブレン(YB)の協力のもと、2度の模擬審査も実施し、令和5年10月2、3日の2日間で審査を受けました。準備の中で大変であったのは、マニュアルの整備・作成で、私には最後の最後まで格闘した感がありました。審査最終日の講評の際に、特に大きな指摘はなく、逆に、少人数で頑張っている部署に対してねぎらいの言葉をいただいた点は印象的でした。12月1日に中間報告として評価C(一定の水準に達しているとは言えない)はなく、B(一定の水準に達している)は4、それ以外はすべてA(適切に行われている)との結果が届きました。令和6年1月には念願の認定証(5年間の認定証)が届きました。

今後もB評価だけでなくA評価でも指摘されました課題を充分検討し、改善して参ります。最後に、YBの小金丸様、受審に当たり病棟や各部門を取りまとめていただきました師長および技師長の皆様、そして、マニュアル作成に尽力されました職員の皆様、本当にありがとうございました。幹部を代表して厚く御礼申し上げます。認定病院として、安心・安全な医療を提供するとともに、地域の皆様から信頼される病院を目指して努力して参ります。



副委員長 原田賢一診療部長



# 初期研修医通信

～初期臨床研修を振り返って～

## 初期臨床研修医 前田 大輝



はじめに、研修医および社会人としてまだまだ未熟な私を受け入れてくださり温かい目で見守ってくださった米子医療センターをはじめとして研修させていただいた日南病院、米子病院、鳥取大学医学部附属病院の先生やスタッフの方々にはこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

2年前に働きはじめたころは右も左もわからず相談できる同期もおらず不安でしたが、指導医の先生方、研修医の先輩をはじめとする多くのスタッフの方々に支えていただき、充実した日々を過ごしていたためか長いようであったという間の2年間でした。

特に指導医の先生方には、医学の知識をはじめとしてカルテの使い方、社会人としての姿勢など様々なことを教えていただきました。また、患者さん一人一人と向き合う時間もしっかりとあり、間違えることも多々あったとは思いますが、スタッフの方々にサポートいただき、本当に多くのことを学ぶ



ことができました。科の垣根も低くわからないことを他科の先生に質問しやすいことも当院の大きな特徴だと思います。また、研修医が少ないこともあり、科のローテーションも福木先生に非常に柔軟に対応していただき、珍しい検査などがあると声をかけていただけたり本当に色々経験させていただきました。当院の研修で医師人生の土台を作れたことを光栄に思い、その土台をもとにこれからの後期研修でもいい医師になれるように必死に努力していきたいと思っています。

最後になりましたが、4月からは鳥取大学医学部附属病院で泌尿器科専攻医として研修させていただく予定で、さらに責任が増す上で、専門医を目指してさらに成長しなければいけない日々だと思います。将来も鳥取県に残ってこの2年間米子医療センターで学んだことを活かして鳥取県の医療に少しでも貢献できるよう日々精進して参ります。

## 初期臨床研修医 栢井 遥己



去年の4月に研修をスタートしてからあっという間の1年でした。始まる前は本当に自分がやっていけるのか不安でいっぱいでしたが、直接ご指導いただきました先生方をはじめ、スタッフの皆様、患者さん・ご家族の方々に温かく迎え入れていただき充実した研修を行うことができました。

月単位で研修する診療科が変わるため、毎回わからないことばかりの状態が始まり、皆様にご迷惑をかけることが多々ありましたが、その都度スタッフの皆様にご迷惑をかけたこと、少しずつできること・わかることが増えていきました。周りの方々のおかげで終えることができた研修だったと改めて思います。

また指導医の先生方が時間を割いて丁寧なご指導をしてくださったことで、学生の時には気付かなかった各診療科の強みや魅力をたくさん知ることができました。

4月からは鳥取大学医学部附属病院で初期研修を行います。この温かい病院を離れることは寂しいですが、米子医療センターで学んだことを活かして、今後も研修に励んで参ります。1年間本当にありがとうございました。

お知らせ

久留一郎院長がNHK Eテレ「きょうの健康」に出演されます。  
痛風・高尿酸血症についての話です。

**本放送(予定)** 令和6年6月17日(月)、18日(火)、19日(水)  
午後8時30分～8時45分

**再放送(予定)** 令和6年6月24日(月)、25日(火)、26日(水)  
正午～0時15分



※放送日は変更になる場合があります。



歯科口腔外科 医師  
川崎 誠

2024年4月より赴任いたしました川崎 誠(かわさき まこと)と申します。

鳥根県松江市出身で、鳥根県立松江南高等学校、徳島大学歯学部を卒業いたしました。卒後研修は鳥取大学医学部附属病院で行い、そのまま歯科口腔外科の医局に入局しました。一度兵庫県の公立八鹿病院へ赴任しておりましたが、その後は鳥取大学医学部附属病院へ戻り、途中大学院に進学し病理学の教室で口腔がんの研究を行っております。

米子医療センターの歯科口腔外科では埋伏歯抜歯や良性腫瘍・嚢胞、炎症を対象疾患とした外来・入院治療を行っております。患者さんにより良い医療が提供できるよう、日々邁進しながら診療に向き合っていきたいと思ひます。



小児科 医師  
山崎 隼太郎

2024年4月より小児科医として赴任しました、山崎隼太郎(やまさき じゅんたろう)と申します。

鳥取市出身で、鳥取西高校、鳥取大学医学部を卒業しました。

松江赤十字病院と鳥取大学で初期臨床研修を修了後に鳥取大学小児科へ入局しました。その後は津山中央病院、鳥取赤十字病院、鳥取大学で勤務し、この度の赴任となりました。専門は小児循環器です。当院では乳幼児に後発する急性熱性疾患である川崎病の診療をよく行われていますが、本疾患の治療においては心エコーによる冠動脈の評価が必須になります。その部分では専門性を活かした診療も行いつつ、小児科全般の対応でも当センターのお役に立てるよう頑張りたいと思ひますので何卒よろしくお願ひします。



消化器内科 医師  
平井 実佳子

鳥取県米子市出身で米子東高校、栃木県の自治医科大学医学部を卒業しました。卒業後は、鳥取県立中央病院での初期研修を行いました。その後、鳥取県立厚生病院、日南病院、日野病院内科の勤務を経て、この度後期研修として、こちらに赴任いたしました。

今までは一般内科医として、かかりつけ医としての診療や、検診等を中心に従事してまいりました。医療センターでは、日々トレーニングを積みながら、消化器疾患全般を診療させていただきます。若輩ではありますが、精進をかさねて参りますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。



整形外科 医師  
津田 歩

4月より整形外科医として赴任しました、津田歩(つだ あゆむ)と申します。

大阪府の出身で、大学から鳥取県に来て10年が経ちました。2000年より山陰労災病院で初期研修を行い、鳥取大学整形外科へ入局しました。その後、鳥取県立中央病院を経て、この度の赴任となりました。痛みや運動機能障害などを訴えてこられる患者さんたちのニーズに最適な医療を提供できるよう、日々精進しております。また若輩者ではありますが、精進してまいりますのでよろしくお願ひ申し上げます。



消化器外科 医師  
尾崎 晃太郎

消化器外科に赴任してきました尾崎晃太郎(おさき こうたろう)と申します。

鳥根県出雲市出身で、出雲高校を卒業した後は鳥取大学に入学、卒業後は松江市立病院で初期研修をしました。その後浜田医療センターで2年勤務した後でこの度米子医療センターに赴任させていただいております。

同じ国立病院機構の病院間での異動ではありますがなかなか慣れないことも多く、はやくスタッフの皆様や地域の皆様と打ち解けたいと思ひながら日々を送っております。

まだまだ未熟ではありますが精一杯精進してまいりますのでどうぞよろしくお願ひいたします。

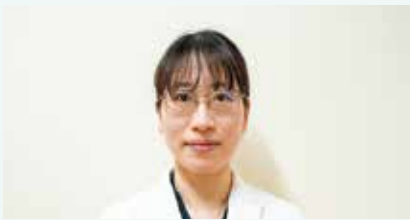




胸部・乳腺外科 医師  
引野 愛莉香

4月より胸部・乳腺外科医師として赴任しました、引野愛莉香(ひきの えりか)と申します。

松江市出身で、松江北高校、鳥取大学医学部を卒業しました。卒後は松江赤十字病院で初期研修を修了し、鳥取大学医学部の呼吸器・乳腺内分泌外科へ入局しました。専攻医としてのスタートを、県西部地区における医療において大きな役割を担う米子医療センターで切らせていただくことになり、身が引き締まる思いです。乳がん診療をはじめ、胸部疾患、内分泌疾患など多岐にわたる診療にかかわり、地域のみなさまのお役に立てるよう精進を重ねてまいります。至らぬ点多々あるとは存じますが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。



血液内科 医師  
梅田 未来

血液内科の梅田未来(うめだ みく)と申します。

米子市出身で、米子東高校、鳥取大学医学部を卒業しました。初期研修は1年目を当院、2年目を鳥取大学病院で行い血液内科へ入局しました。この度4月より米子医療センターに赴任させていただきました。研修医の時にご指導いただいた先生方や、お世話になった尊敬するスタッフの方々と同じ職場で勤務できることが大変嬉しく思います。

血液内科医になって日は浅いですが、病棟と外来の両方で当院の血液内科診療に少しでも貢献できるように、また患者さんに寄り添った診療ができるよう日々精進して参りますので、ご指導、ご鞭撻の程何卒よろしくお願ひ申し上げます。



初期臨床研修医  
大江 百香

初期臨床研修医1年目の大江百香(おおえ ももか)と申します。

鳥取県大山町出身で、米子東高校、鳥取大学医学部を卒業しました。

まだ研修は始まったばかりで分からないことも多いですが、先生方やスタッフの方々がかけてくださり、基本的なことから優しく丁寧に指導いただき、わずかながらですが成長できていることを実感しております。

まだまだ未熟ではありますが、努力と研鑽を怠らず、患者さんが安心して受けられる医療を提供でき、またチーム医療の一員として貢献出来るような一人前の医師となれるように日々邁進してまいりたいと思っておりますので、ご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願ひいたします。



初期臨床研修医  
萩原 大護

初期臨床研修医1年目の萩原大護(はぎわら だいが)と申します。

岡山県岡山市出身で、鳥取大学を卒業しました。

学生時代にさせていただいた見学や、短い期間ではありますがこれまでの研修でも温かい雰囲気でも迎えていただいていると感じています。そのような恵まれた環境で研修ができることに感謝しながら、同時に温かさには甘えずに自律して勉強させていただきたいと考えています。

まだ右も左も分からないような状態でご迷惑をたくさんかけることになると思いますが、ひとつひとつ自分でできることを増やしながら皆様のお役に立てるよう頑張っていこうと考えていますので、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願ひ申し上げます。



初期臨床研修医  
森 海斗

初期臨床研修医1年目の森海斗(もり かいと)と申します。

鳥取県米子市出身で、米子東高校、鳥取大学医学部を卒業しました。

私は鳥取大学医学部附属病院の山陰たすき掛けプログラムで、1年間当院での研修を希望しました。生まれ育ったこの地域に少しでも恩返しができるよう、日々研鑽を積み精進していきたいです。何卒よろしくお願ひします。

# 消防避難訓練を実施して

8階病棟 看護師長 安食 裕子



2月22日(木)8階病棟で消防避難訓練が行われました。新病院開院から10年経過し、今回病院としても、私としても初めての8階病棟の消防避難訓練でした。

「病院災害マニュアル」「災害マニュアル」を読み返し、病棟の構造、避難経路の確認、物品の確認を副看護師長と行いました。今回は日中にデイルーム横のキッチンが発火場所となり、初期消火と共に10名の模擬患者の避難を行う想定でした。8階病棟からは地区隊長の私と、通報連絡係・初期消火班・避難誘導係の4名の参加となり、模擬患者は看護学生。本部は3階の会議室となり、事務部、コメディカル等、すべての部門から参加し、全体打ち合わせ会を2度行いました。その後に病棟看護師や八杉医長、葛馬庶務班長と8階病棟で綿密な打ち合わせを行いました。

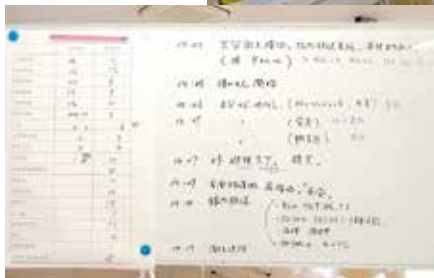
消防避難訓練の当日、14時の火災発生と共に火災警報装置が鳴り響きました。各自がヘルメットをかぶり、初期消火班が消火器をもって消火に当たりました。そして各階の職員が階段を使用し応援部隊として集まってきました。地区隊長、避難誘導係の指示のもと患者の避難をテキパキと開始していき、応援に駆け付けた多職種のチームワークのすばらしさを実感しました。結果的にシナリオ通り消火器では鎮火せず、消火栓を使用し鎮火、終了となりました。

消防避難訓練の後、消防士からの講評を頂きました。スプリンクラーは有効であるが、水損が発生するので初期消火が重要となり複数人で消火器を持ち一齐に消火に当たることや、自動扉は火災発生時にはパニックオープンとなるので避難場所を再考する必要があること等、多くの学びがありました。また参加した職員の振り返りでも、拡声器を持ち、指示を出す方が良い。本部の報告を受ける電話回線が少ない等、改善すべき点が具体化できたと思います。万が一有事が起きてしまった場合、迅速に行動できるために、今回限りの訓練ではなく、常に危機管理の意識を持ち備える必要があると強く感じた訓練となりました。

発火場所は  
デイルーム横の  
キッチン!



避難誘導係の  
指示に従って、  
迅速に!



消防士  
からの  
講評





# 地域医療連携室の掲示板

地域医療連携係長 吉野 眞由美

## 在宅ケア研修会のお知らせ

米子医療センターでは、今年度も地域の医療や介護に従事されている方を対象に在宅ケア研修会を開催いたします。講師には各分野で活躍されている認定看護師さんを中心に薬剤部、リハビリ、栄養士さんなど多職種の方々のご協力を頂きながら年12回の研修会を企画しています。

今年度は昨年度のアンケート結果でご要望のあったリンパ浮腫ケア、褥瘡ケア、スタマケアについて企画いたしました。この研修会では地域の医療従事者の皆様に役立てていただける情報をお届けできればと考えております。お気軽にご参加いただけますようよろしくお願いいたします。



## 2024年度 米子医療センター在宅ケア研修会

**日程予定** 開催予定:下記日程のとおりですが、日程変更の場合もあります  
**研修場所** 場 所:米子医療連携センター1階 くずもホール 時 間:18:00~19:00

**参加人数** 20名程度 **参加費** 無料

**テーマ** 「在宅看護・介護に生かすための専門的知識・技術について学び実践に活かす」

- 研修のねらい**
1. 地域医療支援病院・地域がん診療連携拠点に準じる病院として地域への教育機関の役割を発揮し、地域医療及びがん医療の均てん化を図る。
  2. 地域医療従事者のニーズに応じ、地域医療に必要な知識・技術を提供し、医療福祉施設、在宅支援における実践活動に繋げる。

**研修対象** 地域医療に従事している看護職・介護医療従事者

### ◎研修予定

日 時	研修会内容	講 師
4月25日	在宅で気を付けてほしい薬の話	薬剤師 倉本成一郎
5月23日	糖尿病看護～糖尿病患者さんの災害への備え～	糖尿病看護認定看護師 遠藤 朋子
6月27日	褥瘡ケア	皮膚・排泄ケア認定看護師 船越 知春
7月25日	リンパ浮腫ケア	リンパ浮腫療法士 遠藤 萌
8月22日	スタマケア	皮膚・排泄ケア認定看護師 生田奈都子
9月19日	感染管理	感染管理認定看護師 荻 幹
10月24日	乳がん看護	乳がん看護認定看護師 長本 奈美
11月28日	緩和ケア	緩和ケア認定看護師 山崎 美沙
12月12日	栄養管理	管理栄養士
1月23日	認知症看護	認知症看護認定看護師 大林真由美
2月20日	在宅でできるリハビリ	理学療法士
3月13日	化学療法看護	化学療法認定看護師 小谷奈津子

☆研修予定の1か月前には、研修案内・参加申込書を送付いたします。

**問い合わせ** 米子医療センター 地域医療連携室 TEL:0859-37-3930 FAX:0859-37-3931

## 答 辞

## 卒業生代表 柏木 香南

寒さが徐々に緩み、木々の花が咲きはじめ、春の訪れを感じる今日の良き日に、私たち55回生36名は卒業の日を迎えることができました。本日は、私たちのために、このような盛大な卒業式を挙げていただき、誠にありがとうございます。

また、ご多用の中、ご臨席くださいました学校長先生をはじめ諸先生方、ならびにご来賓の皆様、米子医療センターの職員皆様方には、卒業生一同、心から感謝申し上げます。

私たちは、3年前の4月、新型コロナウイルス感染症が流行する中、看護師になるという夢や希望を抱き入学しました。1年次では、解剖生理学をはじめとする専門的な知識や基礎看護技術を学びました。慣れない言葉に戸惑いながらも、学科試験ではクラスの皆で教え合い、そして、看護技術チェックに向けては、放課後の時間を活用し、看護実習室で、技術練習を繰り返し行いました。

宣誓式では、それぞれが目指す理想の看護師像を、いろいろな色の花につけたモニュメントを作成し、看護師になるという決意をナイチンゲール誓詞にのせ、斉唱しました。

2年次は、学校の中心学年となり、学校行事の運営を行いました。学校祭では、コロナ禍であったため、学年をリモートでつなぎながら、開催しました。様々な制限のある中で、どのようにしたら、学年を超えて楽しめることができるのか、話し合いを重ねました。途中、行き詰ったこともありましたが、学生全体の協力を得て、全員で楽しむことができる学校祭となり、大きな達成感を感じることができました。

3年次は、臨地実習が中心の日々になりました。米子医療センターをはじめとする、国立病院機構施設の皆様方のご理解とご協力の下、そのほとんどの実習を臨地にて行うことができました。

臨地実習では、受け持ちの患者さんの病気の理解や、その患者さんに必要な看護を導き出すために悩むことが多くありました。そのような時、学校の先生方、病棟師長様をはじめとする指導者の方々からのご指導、そして学生間の意見交換を通して、病いを抱えながらも、“その人らしく”生きることを支える看護について、理解を深めることができました。

中でも最も印象に残っているのは、成人看護学実習Ⅲ終末期の実習で受け持たせていただいた、肺がんのため、化学療法を受けられている、老年期の患者さんと関わった日々のことです。患者さんは、病気のため、日常生活動作時に呼吸困難感がありました。しかし、患者さんは、“人に頼りたくない”という想いが強い方であったため、いつも「自分で行うことは、自分でしたい」と毅然と話しておられました。そこで私は、患者さんの想いを尊重できるよう、患者さんの状態を注意深く観察しながら、患者さんがなされる様子をそばで見守るようにしました。また、病気と向き合う患者さんの気持ちが、少しでも晴れるよう、デイルームでお話をしたり、一緒に散歩を行いました。受け持ち最終日には、「あなたがいてくれたから頑張れた」というお言葉をいただき、とても嬉しく思いました。このことから、患者さんの想いを尊重し、患者さんに心を寄せて関わることで、患者さんらしく生きることを支えることにつながると、再認識でき、とても印象に残っています。



ご自身が、病気と向き合わなければならない状況においても、私たち看護学生を受け入れ、学ぶ機会を与えてくださった患者さんやそのご家族に、改めて感謝を申し上げたいと思います。

本学校で過ごしたこの3年間は、時に厳しく、時に温かく導いてくださった教職員の方々、そして、誰より近くで応援してくれていた家族に、本当に支えていただきました。皆様のご支援があり、私たちは看護師を目指すための学習に専念することができました。皆様への感謝の気持ちを忘れることなく、これからは、理想の看護師となれるよう努力していくことで、ご恩返ししてまいりたいと思います。

在校生の皆さん、春には学年が上がり、看護師という道をめざしていく上で、悩み、壁にぶつかることもあるかもしれません。そんな時には、周りを見てください。皆さんのそばには教職員の方々や、同じ道を志す仲間が支えてくださいます。一人で悩まず、相談してください。微力ながら、私たちもお役に立てればと思います。

55回生の皆さん、3年間いろいろなことがありました。辛い時は、皆で声を掛け合い、乗り越えてきました。私は、講義や臨地実習、国家試験など、同じ目標に向かって、一緒に悩み、一緒に励まし合える、そんな皆さんの強さや優しさに助けられました。3年間を思い返して、「こんなこともあったね」と笑顔で話せるのは、皆さんがいたからだと思います。これからも変わらず、お互いに、支え合える存在となっていきましょう。

最後になりましたが、ここにお集まりいただきました皆様方のご健康とご多幸を心から祈念し、答辞とさせていただきます。





# 入学式



## 誓いの言葉

58回生代表 吉川 美咲

大山の雪解けと共に、木々も芽吹き穏やかな春を迎えられたこの良き日に私たち第58回生は米子医療センター附属看護学校に入学します。長かったコロナ禍も収束に向かう中、入学式を挙行していただき、学校長先生を始め、諸先生方、学校関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

私が看護師を目指したきっかけは、高齢者の方が多く入院する病院へ行き、看護体験をさせてもらったことでした。この体験時に、食事摂取が困難である患者さんのために流動食があるということを知りました。また、食事を摂ることに気が進まない患者さんもおられる中で、患者さんと同じ目線ですりどりに優しく声をかけ、コミュニケーションをとっておられた看護師の姿を拝見し、患者さんに合った看護をすることが大切だと感じました。看護体験を通して、看護師は

仕事量も多く大変な仕事だと思いますが、それ以上にやりがいのある仕事だと改めて思いました。また、看護師は沢山ある医療関係の仕事の中で一番近くで患者さんを支える存在だと考え、私も看護師になり患者さんを支えて役に立ちたいと思いました。

私はこの学校で、看護師になるために必要な知識や技術だけでなく、ほかの看護師との連携や、患者さんへの接し方など沢山のことを学びたいと思います。また、今自分に足りないことを把握し、人間的にも成長したいと思っています。

私たち新入生一同は、米子医療センター附属看護学校の学生として誇りを持ち、それぞれが思い描く夢に向かって絶えず努力し続けることを誓います。





保存版

外来診療担当表

令和6年5月1日現在 切り取ってお使いいただけます

診療科	曜日	月	火	水	木	金	備考
総合内科		山本 光紘	交替医	角田 宏明	山本 光紘	交替医	
呼吸器内科		富田 桂公	富田 桂公	唐下 泰一	池内 智行	唐下 泰一	
	専門外来		鳥大医師				
消化器内科		香田 正晴	原田 賢一	松岡 宏至	香田 正晴	松岡 宏至	
		平井実佳子	角田 宏明	大山 賢治		原田 賢一	
血液腫瘍内科		足立 康二	足立 康二	足立 康二		足立 康二	完全予約制
	専門外来	梅田 未来	前垣 雅哉	但馬史人[第2・第4]		河村 浩二	[診療時間] 13時~14時(予約制)
循環器内科			福木 昌治	福木 昌治		福木 昌治	
	専門外来	福木 昌治			久留 一郎		[診療時間](月曜日): ペースメーカー外来 13時30分~予約制 [診療時間](木曜日): 高血圧・高尿酸血症外来 午前中
糖尿病・代謝内科		角 啓佑	石井有李子	角 啓佑	石井有李子	伊藤 祐一	初診は紹介のみ
緩和ケア内科		八杉 晶子	八杉 晶子	八杉 晶子	八杉 晶子	八杉 晶子	※新患は要予約
腎臓内科		山本真理絵	眞野 勉		眞野 勉		
神経内科						守安正太郎	初診は紹介のみ
健診		須田多香子	須田多香子	須田多香子	須田多香子	久留 一郎	事前予約のみ ※乳がん・子宮がん検診を除く
小児科	午前	山崎隼太郎	佐々木佳裕	上山 潤一	山崎隼太郎	佐々木佳裕	[診療時間] 8時30分~
	午後	佐々木佳裕	山崎隼太郎	交替医[急患のみ]	佐々木佳裕	上山 潤一	[診療時間] 15時~17時
専門外来			佐々木佳裕 [アレルギー]	交替医 [乳児健診] [予防接種]	検 査		[診療時間] 午後~ ※詳細な時間は お問い合わせください
消化器・一般外科		奈賀 卓司	交替医	菅澤 健	谷口健次郎	山本 修	
	専門外来	尾崎晃太郎					第1,3週のみ 予約制 [診療時間] 13時~16時
胸部・乳腺外科		万木 洋平	万木 洋平	万木 洋平	交替医	万木 洋平	
	専門外来		引野愛莉香			引野愛莉香	予約制 ※リンパ浮腫は 月・水曜日の午前中のみ
整形外科		南崎 剛	遠藤 宏治	大槻 亮二	南崎 剛 (最終木曜休診)	津田 歩	
	専門外来	遠藤 宏治	林原 雅子	津田 歩	大槻 亮二	林原 雅子	
専門外来	南崎 剛	遠藤 宏治		南崎 剛 (最終木曜休診)			骨軟部腫瘍
専門外来		林原 雅子		大槻 亮二	林原 雅子		火曜:関節リウマチ外来 木曜:関節外科外来 金曜:手の外科外来
泌尿器科		磯山 忠広		磯山 忠広	磯山 忠広	磯山 忠広	
		守安絵美佳	田村 丈	守安絵美佳	守安絵美佳	守安絵美佳	
放射線科		杉原 修司	杉原 修司	杉原 修司	杉原 修司	杉原 修司	
	専門外来	坂口 弘美	吉田 賢史				放射線治療(完全予約制)
歯科口腔外科			川崎 誠	川崎 誠	川崎 誠	小谷 勇	※金曜日は要相談
耳鼻咽喉科		山本 祐子	交替医		交替医		
眼科			三宅 敦子		三宅 敦子		
婦人科						交替医	7月~12月のみ月・金

時間 (診療受付) 8時30分~11時 (健康診断受付) 毎週火・水・金/予約制

診療情報提供書:FAXによる紹介状の送信先